

中野好夫と『アラビアのロレンス』：作品 成立の背景をたどり戦時下の思想を読む

新川, 明 / アラカワ, アキラ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

267

(終了ページ / End Page)

291

(発行年 / Year)

1986-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015622>

中野好夫と『アラビアのロレンス』

― 作品成立の背景をたどり戦時下の思想を読む ―

新川 明

1

中野好夫には周知のように、数多くの伝記文学（若しくは史伝文学）とよべる作品群がある。その最高傑作は、いうまでもなく晩年の大著『蘆花徳富健次郎』三部作であろうが、『アラビアのロレンス』も中野好夫の伝記作品の中で文学的な完成度の高い好著である。

この本の初版は、一九四〇年（昭和十五）、中野好夫三十七歳の時に公刊された。著作目録をみると、一九三四年に発表された『バニヤン』に次ぐ伝記作品である。戦後の一九六三年には、「ほとんど新著とっていい」改訂版が出されて今日に至り、定本になっていることも周知のとおり。

このほかに、「沙漠の叛乱 ― T・E・ロレンス」と題する短い作品がある。一九五三年、雑誌『新

『潮』に連載した一連の伝記作品の一つで、内容は刊本『アラビアのロレンス』（岩波新書）の抄約ともいえるものだが、一編の作品としても独立した体裁をもつ好編である。これはのちに、文庫本『世界史の十二の出来事』に収められたので、新書版の『アラビアのロレンス』ほどではないにしても、広く読まれている中野作品の一つである。

このように、三十七歳のとき新書版『アラビアのロレンス』初版を刊行、五十歳のとき抄約版「沙漠の叛乱」を書き、六十歳にして新書版の改訂版を執筆するという、トマス・エドワード・ロレンスにかかわる軌跡をみていると、ロレンスに寄せる中野好夫の関心の深さを感じさせずにはおかない。ロレンスに対して中野好夫が関心を抱いたのは、「東大英文科の学生だったころ」からだというから、実に半世紀にちかい執心であり愛着の持続である。

シェークスピアやスウィフトなど専門分野の人物を、終生くりかえし論じているのは当然のことである。何の奇異もないが、専門分野の外の人物の、しかも伝記作品に、上述のように再三にわたって執筆の意欲をみせているのは、ロレンス以外にはない。このことは、中野好夫の読者のひとりとして、少なからず興味を覚えさせられる事柄である。

2

中野好夫が『アラビアのロレンス』初版を書いたのは、上述のように一九四〇年（昭和十五）である。

いったい、三十七歳の中野好夫をして、この時期に『アラビアのロレンス』の執筆に向わしめた動機、執筆の意図は何であったのか。この素朴な「問い」が、このところ私のところをとらえつつ書いていた。

そもそも、私がなぜ、この「問い」にとりつかれたのかというと、過日、ある雑誌の企画で歴史家の色川大吉氏と対談した折りに色川氏の言葉に触発され、さまざまに思いがふくらんでしまったからである。その雑誌『新沖縄文学』64号（一九八五年六月）の、中野好夫追悼特集での対談内容は、ふたりの話を的確に要約したもので、実際には誌面にあらわれた言葉に倍する分量の対話があつて、とりわけ色川氏の発言に教えられるところが多かつた。その中の、『アラビアのロレンス』についての言及にも、誌面に出なかつた部分があつて、以来、私はさきの「問い」にとりつかれてしまうことになるのである。

そこで色川氏は、中野好夫が歴史に対して非常にグローバルな視野をもっていたことに触れたうえで、その中野好夫と『アラビアのロレンス』を書いた中野好夫がどのように結びつくのか分らない、と疑問を呈された（前掲誌49ページ）。この発言を受けて、「アラビアのロレンスの場合、一種の革命的ロマンチズムというような側面から分かる気がする……」と私が口走り、色川氏が苦笑されるといふ一幕があつたのである。

『アラビアのロレンス』における中野好夫の、ロレンスに対する限りない関心と、人間的な強烈な共

感が、同書を読んでいて伝わってくるし、沙漠の遊牧民を組織して神出鬼没の活躍でアラブ人に対する圧政者であるトルコ軍を撃破していく不死身のロレンス像に、被抑圧者の側に立つ解放戦士のイメージが浮き彫りにされているからであった。しかも、中野好夫の流麗にして闊達な筆力は、読者としての私の、革命的ロマンチズムへの思い入れをかきたてずにはおかなかったからでもある。

「エキゾチシズムはともかく、革命的ロマンチシズムはない。ロレンスは結局、イギリス帝国主義の植民地政策の手先きみたいなものになりますから……」と、色川氏は歴史家としてロレンスの位置づけを示し、やんわりと私の無知をたしなめられた。

3

たしかに中東における英独争覇と戦勝後の分割支配をめぐる英仏の政治的な策謀は、帝国主義戦争としての第一次大戦の性格を如実にあらわしている。その大戦に勝利してトルコ支配下の中東をフランスならびにロシアと分割支配する野望を秘めつつ、解放をねがうアラブ人をペテンにかけて決起させ、トルコを駆逐するのに利用したイギリスのやり方は、帝国主義者の本質を典型的にみせている。その戦略が成功するうえで、直接に絶大な力を発揮したロレンスの活躍も、その限りにおいてイギリス帝国主義の先兵としての役割を結果的に果たしたことは否定できない。

しかしながら、そのゆえをもって、ロレンスその人を直ちに「帝国主義の手先き」として片付けて

しまうには、少くとも中野好夫の『アラビアのロレンス』を読む限りにおいては、にわかには同調できないのも私の実感であった。より純粹にアラブ人の解放を信じながら、結果的に彼らを裏切り、イギリス帝国主義の手先きの役割を果たすことになったロレンスが、みずからの祖国イギリスの背信を、いかに怒り、失望し、悩みつづけていたかを、中野好夫はくり返し指摘し、情熱をこめて活写しているからである。

もとよりロレンスに対する世の評価は大きく分かれて、その評価をめぐって論争がくり返された。「昨日の『聖友』『天才』『理想主義者』は、たちまち『大嘘吐き』『露出狂』『変質者』ということにまでなってしまった。そして現在は、いわば一種の安定期にあるのではないか」と、中野好夫は改訂版「まえがき」で書いている。ロレンスにかかわるそれらの毀誉褒貶が交錯する文献資料を能う限り渉獵し、検証したうえで書かれた『アラビアのロレンス』であるが、中野好夫のロレンスに対する評価は、戦前の初版本も戦後の改訂版も、基本的には一貫して変わらない。

すなわち、「やはり彼は当代最大の人物の一人だったと思う。彼のような人物は、ほかには知らないし、また将来も見ることにはなからう」と評価するウィンストン・チャーチルのロレンス評を引いたうえで、このチャーチルの評は「依然として生きているといえよう」と改訂版に書きとめた言葉が、中野好夫のロレンスに対する変わらない評価の基本でもある。

中野好夫は初版を書いた時点で「出版されている彼の評伝は殆んどすべて」目を通し（初版序文）、

その後も「改訂の気はあまりなかった」にもかかわらず、「文献は心がけてあつめ」つづけていたという（改訂版「まえがき」）。その渉獵の軌跡は、初版と改訂版の巻末にそれぞれ付されている参考文献書目（一部）を引きくらべて対照するだけでも一目のうち知り得ることだが、そのうえでなお、ロレンスに対する評価は上述のとおりであった。

4

中野好夫が『アラビアのロレンス』の再版に際して「ほとんど新著とっていい」ほどの改訂をした理由は、第一に初版の時点では「資料的に不満足」であったが、戦後新しい資料がおびただしく出たこと、第二には「筆者自身のロレンス観の変化ということもあった」という（改訂版「まえがき」）。

中野好夫のロレンス観が時間とともに変化したことを示唆するこの言葉は、初版（戦前）と改訂版（戦後）とで、何か決定的な見方や考え方の変化があったのか、と思わせるのだが、両者を読み比べてみると、基本的、根幹的な意味での変化がないことは明白である。

初版当時は目にするのができなかった関係資料（たとえば『智慧の七柱』につづく自伝的作品『造幣所』^{ミント}など）の公刊によって、より正確なロレンス像への接近が可能になったこと、さらには初版当時は「まだ三十代の半ばであり、それにロレンスカぶれという気味もないではなかった」だけに、「一種情熱みたいなものをこめて書いた」ものだから、「もっと客観的に見ないわけにはいかない」という程度

の“変化”とみてよいように思う。

そして、両書を通して基本的なロレンス観・ロレンス評価は肯定的、積極的で、人間的共感にみちたあたたかい目差しがそそがれている。

そのような中野好夫のロレンス観・ロレンス評価の“変化”の程度は、たとえば次に引く一節の表現のちがいによって察しがつくのではないか、と思う。

アラブ人の叛乱Ⅱ決起がいよいよ切迫した一九一六年末、フランスがイギリスに働きかけて、戦後の中東分割（勢力範囲の策定）を取り決める秘密交渉がはじまり、翌年五月、歴史上悪名高いサイクスⅡピコ協定が成立する。

「イギリス、フランスは七面鳥のそれぞれ両翼をとった。ロシアは胸をとった。アラブ人にはまさに臓物と脚とがあたえられたのだ」というリデル・ハートの、この協定に対する「辛辣きわまる批評」を紹介したうえで、「あのイエス磔刑の日、まだ息も絶えない彼の十字架の下で、その着衣をくじ分けしつづあった兵士の姿さえ、なおこれほどには我執に充ちていなかったのではあるまいか。」と、中野好夫も糾弾の筆を取っている協定である。

そのような英仏両国の秘密協定の成立を知ったロレンスについて、初版と改訂版の中野好夫の記述の差異は次のごとくである。

「この書物（『智慧の七柱』Ⅱ引用者注）を読む者は、この良心の英雄がいかにこの一片の紙片のために

苦しみ、懷疑し、絶望したかを知るのであろう。」（初版46ページ）

「この書物を読むものは、彼の良心がいかにこの一片の紙片のために苦しみ、懷疑し、絶望したかを語られるであろう。」（改訂版50ページ）

ほとんど同じことを語っているのだが、最大の違いは、傍点を付したごとく、初版においてロレンスのことを「良心の英雄」と規定している点である。そして、この表現に、初版当時の中野好夫のロレンス観が明確に示されているとみてよいだろう。改訂版でこの部分は「彼の良心」という風に「客観的」な表現に修正されたが、中野好夫のロレンス観の変化とは、こういう形の「変化」にすぎない。アラブ解放の志に燃え、祖国イギリスの背信行為にも、初志を貫くべく奔走する人物としてのロレンス像を追求する中野好夫の主調音は、両書とも全編に一貫して変わらない。

さて、さきののべた「問い」——、三十七歳の中野好夫が、初版「アラビアのロレンス」を執筆した動機と意図は何であったのか、という本題に立ち戻らなければいけない。

色川大吉氏の指摘は、私に少なからず衝撃を与えた。その視点に立ってロレンスをみると、いわば「反革命」の象徴的な人物ということになるからである。そのような人物を「良心の英雄」と位置づけて積極的に評価し、肯定的に描く中野好夫をどのように理解すればよいのか。その視点に立つ限り、グローバルな視野を持つ硬骨の論客であり、学者であり、文学者でもある中野好夫と、どのように結びつくのか、色川氏ならずとも首をかしげざるを得ないだろう。私は自問自答をくり返すうちに、一

つの途方もない仮説を思い描くに至った。

5

中野好夫が『アラビアのロレンス』を書いた一九四〇年（昭和十五）という時代は、日本軍の中国大陸への侵略はすすみ、武力行使をふくむ南進政策（大本営政府連絡会議における「世界情勢の推移に伴う時局処理要綱」）が決定された年である。そして、北部仏印（ベトナム）への進駐をみた年である。国際的には日独伊三国同盟の調印、国内的には大政翼賛会が発足して、真珠湾奇襲にはじまる太平洋戦争の勃発を翌年にひかえた大戦前夜の緊迫した時代背景がある。

すでに中国東北地方に傀儡政権をもって満州国を建国して八年、新たに「大東亜新秩序の建設」を基本国策として決定して、大東亜共栄圏のスローガンを打ち出した年でもある。いうまでもなくこのスローガンに示される構想は、それまでの日・満・支を範囲とする「東亜新秩序建設」の枠を東南アジア、インド、オセアニアの方まで広げて、欧米列強の植民地支配下にあったこれら諸地域を日本の勢力下におさめる狙いをもつものであった。そして周知のように、その構想は、日独伊三国同盟の世界戦略構想（いわゆる枢軸国側による世界分割支配構想）の一環をなし、日本の太平洋戦争はこの目的に添った侵略戦争でもあった。

太平洋戦争の緒戦で日本軍は、またたくまにこの構想に示された諸地域の大半を攻略し、米、英、

蘭、仏の支配勢力を駆逐して占領したが、現実の占領地では、苛酷な軍政か傀儡政権による統治をもって物資と労働力の収奪を行うのみで、「共栄圏」の美名とはおよそかけ離れたものであったことも歴史が明らかにしているところである。

しかしながら日本は、国民をあげて「大東亜共栄圏」の美名に酔い、侵略戦争を「聖戦」と信じて太平洋戦争の遂行に雪崩れをうって没入していったことも歴史の事実として動かせない。人びとは、欧米列強の植民地支配下にあるアジア諸国の解放を「聖戦」の大義と信じて行動した。

日本の敗戦によって終結した太平洋戦争のあと、これら諸地域の各国がそれぞれ独立したことをもって、日本の戦争行為を正当化する、いわゆる「大東亜戦争肯定論」などが戦後の論壇にあらわれ、今日でも保守派の主張するところになっていることも事実である。

さて、こういう歴史の流れを眺めていると、実際には世界再分割支配を企図した帝国主義的な侵略戦争であったにも拘わらず、列強の植民地支配下に呻吟するアジアの諸民族を、列強の支配から解放する「聖戦」と位置づけて太平洋戦争に突入した日本軍のイメージと、実際にはさきに触れたごとく、中東の分割支配を企図しながら、トルコの圧政からの解放を唱えてアラブ人の決起を促してアラビア半島からトルコの勢力を駆逐するのに利用した第一次大戦におけるイギリスのあり方、とりわけその最前線において不死身の活躍をしたロレンスのイメージとが、見事に重なり合ってくることを払拭することはできない。

「大東亜共栄圏」のローガンに示される当時の日本国の国策（大東亜新秩序の建設）は、国内における「新体制」の確立とならぶ基本方針として一九四〇年（昭和十五）七月に策定された。中野好夫の『アラビアのロレンス』初版が公刊（同年九月）される直前の時期にあたる。

この「大東亜共栄圏」の構想にみる国策と、インドネシアをふくむ世界の回教圏とのかかわりが、当時の日本でどのように把握され、認識されていたのかについて、専門家でもなく、かつ不勉強の私には全く知識がない。とりあえず目にすることができた資料は、財団法人善隣協会、回教圏研究所（大久保幸次所長）編の『概観回教圏』のみである。

同書の公刊は、一九四二年（昭和十七）十一月で、中野好夫『アラビアのロレンス』初版におくれること約二年である。それゆえに中野好夫がロレンスを執筆した時点の情況の反映を直接的に読み取るには少し難点があるが、太平洋戦争前後の「大東亜共栄圏」構想と回教圏への関心のあり様（方向性）を知る手がかりにはなると思われる。

「いまや世界史の転換を指導する日本の大いなる立場は、回教圏に関する正しく、広き知識の獲得を不可欠なる国民的関心事にまで昂めた。けだし、本書の刊行も、さうした時代的希求に応ぜしめんがために外ならない。」（同書「序」）

このように刊行の意図をのべた同書は、第一章回教教理、第二章回教圏史、第三章サラセン文化、第四章回教圏の人種および言語、と説きすすみ、以下アフリカ、トルコ、バルカン、ソビエト、イラン、アフガニスタン、インド、インドネシア、支那、満州国、蒙疆、日本と、全十六章にわたって世界各地の回教徒の興亡転変の歴史や現況を概説したものである。

本文の記述は、学術的な啓蒙書というべき客観性を守り、政治的な色合いは少ないが、とりわけ本文末尾の「結語」は、当時の国策に添った同書編纂の意図を十分に示している。すなわち、国策の指向が世界回教圏の志向に合致するという主張が高らかに表明されて、当時の時代思潮を十分に反映しているのである。少々長くなるが、全文引用する。(旧漢字、旧仮名づかいは改めた)

東亜新秩序建設の目標は、二重の意味でわが国の世界政策を示現している。即ち、東アジアより米英の勢力を駆逐し、日本を中心に東亜に新秩序を建設することそれ自体が、世界史の転換を意味することはいうまでもない。さらにこのことは、視角を変えれば、回教圏の解放にとって、一大推進力たり得ることを意味するもので、これまた、世界史の合理的な前進に日本が寄与し得る一つの立場なることを忘れてはならない。回教圏はともかく維持した自己の尊厳を、前世紀以来、たえず打ちくだかれきたったのである。解放を名目とする戦に欺かれ、押しひしがれながら、いかに回教徒は、多くの犠牲を強いられたことか。しかして、いままた、エジプト、シリア、イラク、イラ

ンの独立は、イギリスの暴力の下に、全くの空名と化し、サウド・アラビアもまた、その圧迫に抗し得ず、奄々たるものがある。

しかしながら、一方においては、トルコの中立維持のための懸命な努力、独立問題に処するインド回教徒の熱烈な態度、さらに東亜共栄の事業に参画し得て、歓喜に溢れるインドネシア回教徒の雄々しき立上りなど、回教圏の希求する正常なる方向も、いま、まさに明示されている。この方向は、自らわが日本の世界史的使命遂行の方向と一致するものがあるではないか。されば大東亜共栄圏内の回教徒を、日本が指導して建設面に引き上げていくことは、全回教圏の更生を誘導することに外ならない。まことに、七つの海の支配を呼号したイギリス帝国の没落は、それを貫く現実的紐帯の故に固く相結ぶ回教圏の更生を、消極的ながらもちきたらすものであり、米英打倒を当面の目標とするわが聖戦の遂行は、必然的に、全回教圏問題打開の使命をわれらに担わせるに至った。われらが、同胞の回教に対する、広き、正しき知識の普及と、それにもとづき始めて可能な回教研究の一層の前進を希求してやまない所以も、まさに、かかる使命の達成に資したいからに外ならない。

以上のように、朝野をあげて国策の遂行に邁進した時代思潮を、この一文から明瞭に読みとることができる。なお、この回教圏研究所には、かの竹内好も研究員として参加しており、同書の支那、満

州、日本の各章は竹内の担当になる。

7

前掲の『概観回教圏』『結語』の文中で、傍点を付した部分は、明らかにロレンスが参画した第一次大戦におけるアラブ人の決起とその結果（イギリスの背信）を指しているところであろう。

さて、いささか回り道をしてきたが、私が思い描いた「途方もない仮説」というのは、中野好夫が一九四〇年という前述したような時代状況の中で『アラビアのロレンス』を書き、世に送り出したのは、すでに触れた国策の指向するところ（具体的には前掲「結語」にみられる当時の思想動向）に見合った作業ではなかったか、という疑問である。私はこの疑問にぶつかった時、若しこの「仮説」が正しいのであれば、中野好夫研究の極めて重要なテーマになることはもとより、さきに触れた色川大吉氏の指摘にも全面的に服従するしかない、と観念した。

中野好夫が戦後、戦争犯罪者の記名を求めたアンケートに、「中野好夫」と、みずからの名を記して答えたというエピソードは余りにも有名である。さらに中野好夫が、「私自身の如きも一度として聖戦などと思ったこともない、書いたこともない（これは私の書いた一切の断片を提出しても断言できます）。また勝つともあまり思えなかった。と、私に決して傍観して日本の負けるのをニヤニヤ待ち望んでいたわけでは決してない。十二月八日以後は一国民の義務としての限りは戦争に協力しました。

欺されたのではない。進んでしたのであります。」と、戦時下の自分のあり方を卒直に述べた「怒りの花束」の一節も、知識人の戦争責任を語るに際して、しばしば引用される有名な言葉である。

この言葉の中の「傍観」「ニヤニヤ」をめぐって、加藤周一や丸山真男が一定の中野批判をこころみていることも知られるとおりが、「傍観していた人はみなニヤニヤしていたのか」という形で、全く中野好夫一個人の身の構え方についての説明の言葉を一般論に押し広げ、論理を組み替えて切り込む加藤や丸山の論法は賛成できない。まさに詭弁としか言いようがない初歩的な論理のすりかえを前提に議論を展開しているわけで、いかに卓論を展開しても説得力に欠けると言わざるを得ない（加藤周一「戦争と知識人」、丸山真男「中野好夫氏を語る」）。

加藤・丸山の中野批判をめぐる問題は本稿の主題と離れるので措くとして、いずれにせよ中野好夫が戦時下の身の処し方として、国策には国民の義務の限りで従う、という立場を守ったことは「怒りの花束」の自省の言葉の通りであった。

丸山真男はそのような中野好夫を次のように描いている（『中野好夫集』月報11）。

「中野さんというところ、何々大笑したり、偽悪家ぶったり、そういう面がとかく強調されるけれど、その反対のまじめさ、むしろあまりにまじめなところが実は心のシンにある。そのまじめさが明治以後の教育とくっついて、国家が危機に陥った以上、国家の命ずるところに、国民として自分の義務に従うべきだという、そういう倫理を疑わせなかった。敗戦によってはじめて反省した。」

このように国策には国民の義務として従うことに疑いをもたなかった戦時下の中野好夫が、『アラビアのロレンス』を書いた時、アラブ人の解放に挺身するロレンスのイメージに、どのような思いを仮託していたのであろうか。あるいは、その中野好夫をして、あの時代背景のなかで『アラビアのロレンス』の執筆に向かわしめたそもそもの動機は何であったのか。

中国大陸への侵略が満州国の建国を経て日中戦争へと進んでいった時代の中で、たとえば馬賊を組織して抗日ゲリラ（当時は「匪賊」と呼んだ）を討伐するために満州の荒野を疾駆する大陸浪人や日本軍特務機関員の冒険物語が少年雑誌に登場して軍国少年たちの血をわかしていたし、同様の物語は『キング』などの大衆娯楽雑誌にもしばしば登場したように記憶している。それらは、侵略戦争をロマンティックな正義の戦いとして幻想させる麻薬のような作用を果たしたといえるが、『アラビアのロレンス』も、その時代背景の中でそれらの大陸熱血物語とオーバラップし、「聖戦」に挺身する「勇士」たちの武勇談に投影されて読まれたのではないか。

中野好夫に、そういう状況に対応する「計算」があったのではないのか、という緊迫した疑問が私のところに雲のように湧きあがるのを抑えることはできなかった。

8

蟹はみずからの甲羅の大きさに合わせて穴を掘る、という。まさに前記の私の疑問が、私自身の卑

小さに見合う妄想でしかないことを、程なくして中野好夫自身の言葉ではっきりと思い知らされることになった。

『アラビアのロレンス』初版を公刊して約十カ月後の一九四一年（昭和十六）、中野好夫は雑誌『文藝』七月号に、「ロレンスのことなど」という短いエッセイを発表して、当時の世評に対する言い分や執筆の動機を書いている。それを讀むと、さきの私の疑問がいかに的はずれであるかを直ちに納得させてくれるのである。そして、中野好夫がこのエッセイを書かねばならなかった、ということとは、とりもなおさず当時のジャーナリズムの中で、私同様の「下司の勘ぐり」や時流にのった「最眞の引き倒し」などが広く存在して中野好夫を困惑させていたであろうことを示してもいる。

「最近思いがけない中東戦局が騒がしくなっていて、イブン・サウドと共にロレンスの名前がジャーナリズムに躍らされ、私まで何かと書かされるが、私はロレンスの代理店でもなんでもないので、実は何か多少変な気がするのである」（原文旧漢字、旧仮名、以下同じ）という書き出しで、そのエッセイははじまる。

初めのころは「所謂ロマンスの英雄」として好奇心を感じ、やがてグレイヴスやハートの伝記を讀み、『智慧の七柱』を手にするに及んで「興味は頂点に達した」と、中野好夫は自身の歩みを振り返ったあと、まずこの頃の一つのロレンスブームの時流を次のように皮肉をこめて批評している。

「一体近頃××のロレンスという亜流が、頻りにジャーナリズムの上で製造せられているが、注意す

べきことは、ロレンスの存在などは大戦が済んで後まで殆んど世間は誰一人知らなかったのであるし、いや在アラビアの英軍将校の間でさえ彼の名を知る者は数えるくらいであったという一事だ。いわば彼は一人黙々とアラビア人独立に生命を賭けていたのであって、仕事をしない前から鳴物入りで宣伝された男ではないのだ。また、将来に於いてもロレンスのような、或いは彼以上の政治的軍事的行動をする人間はいくらでも出て来るだろう。だが、『智慧の七柱』の書けるロレンスは、恐らく皆無とはいわないまでも、稀であろうと思う、この一事も付け加えていいだろう。」

そして『アラビアのロレンス』を書いた立場について、「……私はとても、『アラモード当世風英雄』のような取扱い方をする気持にはなれなかった。英雄であるかどうか、私は知らない。だが、彼が稀有の一個の性格であったことは疑えない。それが私には興味があったのだ」と書いている。

英雄であるかどうか知らない、と書くあたりは、現にさきにみたように「良心の英雄」とロレンスを表現している厳然たる事実からして、いささか中野好夫独特の居直りの修辞も感じられるが、この短い文言の中に、中野好夫をして『アラビアのロレンス』を書かした動機は、端的に表明されているといえるだろう。すなわち、人間に対する興味と『智慧の七柱』への高い評価である。

人間に対するあくことのない関心と好奇心が中野好夫の重要な特質であることはすでに定評のあるところだし、自身が「かねて人間の歴史には深い興味があり、折りにふれそんな方面の書物は、金のゆるすかぎり買い集めていた」（『世界史の十二の出来事』あとがき）ところでもある。その中野好夫が、

「稀有の一個の性格」として傑出するロレンスに強く魅かれたいわけではない。さらにもう一つ、中野好夫を魅きつけたのは、そのロレンスによって書かれた自伝的作品『智慧の七柱』に対する文学者としての共感と評価であろう。

『智慧の七柱』については、『アラビアのロレンス』の文中でもしばしば賛辞を呈する場面がみられるが、このエッセイの結語もそれへの評価で結ばれている。

「それにしてもそのスタイルは相当難解を極めている。(略)そのくせこの難解さは、異様な粗々しい力をもった感触と、明晰な陰影と、そして一種不可解な詩の高さをもっているようである。これもまた難文の名文とでもいうのであろうが、所謂素人文学と玄人的な技術とがギリギリ一杯のところまで結びつき合っている姿勢が、私には常に興味深く思われる。」

このように『智慧の七柱』の文学性を高く評価する中野好夫の視点は、『アラビアのロレンス』執筆の動機を考えるうえで重要なキーポイントになると私は思う。その点に触れる前に、いま一度エッセイに戻ろう。

『アラビアのロレンス』初版に対して、当時の時流に即したさまざまな批評があったことをそのエッセイはうかがわせるが、それに関連する部分として、次のように書きとめている点も見落せないからである。

「今一つの批評は、ロレンスの行動が今のわが国のインテリゲンチアに対していろんな示唆を含んで

いるということだった。お世辞だか何だか知らないが、これも私一個としては迷惑だった。モーロアの『フランス敗れたり』が大いに他山の石になったり、ロマンの『ヨーロッパの七つの謎』が吾々の反省を促す教訓に充ちていたりするように、別にロレンスの生涯が吾々にどうのこうのということはいくとも私の意図にはなかった。それでは貴様はロレンスの何が面白くて本など書いたのかと言われると困るが、何も本を書くためにロレンスを読んでいたのではなくて、書いたのは岩波のY君が機会を与えてくれたからにすぎない。(略)私は決してロレンスの中に所謂現代相応とやらを発見したのではない。ただある時期の私自身がロレンスという一人の性格に興味を抱いたという閑人の閑事であるにすぎない。」

ここにも中野好夫らしいシニカルな開き直りと、独特のおとぼけ振りがみられるが、予期せざる世評の、時流にのった深読みの横行に辟易した中野好夫の苦い表情が目に見えるようではないか。

9

『智慧の七柱』に対する文学者としての評価がロレンスに対する評価と関心をさらに高め、中野好夫をして『アラビアのロレンス』の執筆に向わしめた内的契機の重要な側面ではないか、と私が考えはじめたのは、初めのところで書いた「問い」にとりつかれ、初版、改訂版を読み返すうちに、文学としての『智慧の七柱』に瞠目している中野好夫の姿を、いよいよ強く感じないわけにはいかなかった。

たからである。そして、さきのエッセイの結びの言葉を目にするに至って、その思いは疑う余地を残さない確信となった。

さらに、中野好夫の文学観、とりわけ伝記文学（史伝文学）についての考え方を考え合わせると、『智慧の七柱』への高い評価と、それを通して「稀有な個性としてのロレンス」の人間分析に、伝記（史伝）作家としての中野好夫の執筆意欲が、ふつつつと湧き出てきたものであるうと思える。つまり、いかにも時流に即した作品であるかのように見えるし、前述のように現実にもそのように見られもした『アラビアのロレンス』は、自身がさきのエッセイで明確にしているとおり、全くその「意図」はなく、まさしく稀有な人間・ロレンスと、その作品『智慧の七柱』に魅かれた文学者・中野好夫の内なる創作意欲の湧き出するままに生まれた作品である、ということにつきる。

中野好夫の文学観――、とくに歴史学と文学とのかわり、史伝小説を含む歴史小説について論じた「露伴の史伝小説」の次の一節を読むとき、この私見が決してははずれではないことが明確になる。そこで中野好夫は書いている。

「社会学的、歴史学的批評はたしかに裁断の一つのデータではあろうが、歴史学を文学たらしめるのは、なにも社会学的、歴史学的批評家のいうごとく意味での歴史的現実の再現が必ずしも最後の決定要件ではない。最後はむろん文学であることである。」

「秀吉の、家康の、いや伊達の、蒲生の真実が、詮議詮鑿の上でそうでないというのは、ここでは少

しも重大でないのだ。それは歴史家の仕事であろう。だが文学においては、この信じこむ心、惚れこむ心、それもまた限りなく貴いのだ。(傍点引用者)

「もとより文章は文学のいっさいの条件ではない。しかしながら最後の一步手前の要件であることは厳として動かない。議論はとにかく、事実において文学が八分まで文章であることはこれまたたしかな事実である。」(以上は筑摩書房『中野好夫集』第一巻所収より)

このように論じた中野好夫のエッセイ「露伴の史伝小説」が書かれたのは一九四二年(昭和十七)のこと、『アラビアのロレンス』初版の刊行から二年後のことである。

信じてこむ心、惚れこむ心、そして文章こそが文学において大事な要件であると説くこの主張は、時流とかかわりなくロレンスに魅せられ、磨きぬかれた文章で質の高い伝記文学『アラビアのロレンス』を生み出した当時の中野好夫の文学的立場を余すところなく語っているといえよう。

10

最後にあと一つ、気にかかる一編がある。『アラビアのロレンス』初版を公刊する前年、すなわち一九三九年(昭和十四)二月、雑誌『思想』に寄せた論文「知識人のある傾向について」である。

これは当時の英国文壇の動向を、二つの世代を対比しながら紹介したもので、「一九二〇年代にその最高の仕事をしてきた」E・M・フォースター、ミドルトン・マリ、オールダス・ハクスレー、ハー

バード・リードらの論調と、「一九三〇年代に入って、主として上に挙げた二十年代の個人主義的文学に対する反定立として登場してきた」ステイーヴン・スペンダー、C・D・ルイスらの主張と対立点を要点をおさえて述べたものである。

その限りでは、海外文学思潮の紹介を趣旨とした論文だが、私が気持を動かされたのは、この論文の中で、両世代対立の構図の要因を第一次大戦によって受けた衝撃の有無に求め、とくに第一の世代がその衝撃のゆえに著しい政治不信に陥っていることを指摘したくだけりである。

「上に挙げた第一の世代というのは、ほとんどすべてが彼らの青年期、すなわち美しい夢と理想をもって世界へ出発した、感受性の最も鋭敏な時期を、あの大战の衝撃にやられた連中である。彼らが既成の規範いっさいに対して疑いの目を向けるに至ったのはこの故である。そしてその最も顕著なものは政治への不信ということである。政治家のいかなる欺瞞が大战を導いたか(略)。そうした政治という機構を彼らはもはや信じる事ができなかった。」

そしてさらに、ジョイスやハクスレーの思想傾向に触れたうえで、筆をすすめてロレンスに及び、次のように指摘する。

「あのアラビアのロレンスがヴェルサイユ会議後まもなく、政治の欺瞞にあきれて、ついに彼自身を社会から抹殺しようとした『逃避行』^{エスケイピズム}のごとき、この世代知識人の政治観を示す最も象徴的な行動と見ることができよう。」

これらの文言を読んでいると、あたかも中野好夫が、イギリスの文学思潮や知識人の動向に仮託して、戦争拡大への道をつきすすむ眼前の日本の政治への不信感を言外に吐露しているのではないか、と思えるほどである。さらに「深読み」すれば、そのような戦争屋Ⅱ政治家の欺瞞を知る者は、いきおいジョイスの心理主義小説のように「個人心理の底知れぬ袋小路にもぐり」こむか、ハクスレーのように「戦後社会を無意味な道化師と見て、冷嘲、懐疑をほしのままに」するか、ロレンスのように自己抹殺の「逃避行」を企てるしかない、と訴えているようにも読み取れる。

それが、あながち無謀な「深読み」でないことは、たとえばこの論文を「現代英国文壇の現状と動向」というような題名にせず、あえて「知識人のある傾向について」と、一般化した含みのあるタイトルにしたうえで、冒頭を、「近年は文化一般、したがって文学に対しても、政治的な重圧が著しく感じられる事実は、世界共通の現象であるらしく、将来あるいは一九三〇年代を特徴づける著しい文化的動向の一つであった、というようなことになるかもしれない。」と、日本の現実の情況を含めたグローバルな歴史認識をもって書き出していることでも察しがつくと思う。

中野好夫のこの予見はまさに的中して、一九三〇年代を特徴づける歴史の位置づけがそのとおりになったことは申すまでもない。

ともあれ中野好夫は、このように含みのある論文を発表した翌年、「この世代知識人の政治観を示す最も象徴的な行動」を見せたロレンスの伝記作品『アラビアのロレンス』を公刊したのである。

そこで再び私の独断的な「深読み」を許してもらえれば、そのようなロレンスの生涯を描くことで、時局に対する知識人のあり方（現実政治への不信を自覚した知識人のあり方）をひそかに訴えたい意図をもその執筆の動機の底深く秘めていたのではなかったのか、と思わざるを得ないのだが、いかがなものであろうか。さきにみたエッセイ（「ロレンスのことなど」）で、「ロレンスの行動が今のわが国のインテリゲンチャに対していろんな示唆を含んでいる」という批評は迷惑だ、と書いているにもかかわらずである。ここで中野好夫が迷惑がっている批評とは、私のいう「ひそかな意図」とは逆の、のちの文芸報国会的な方向の批評を指しているとみられるからである（それを実証する時間はなかった）。そのよくな時流にのった批評を冷嘲しつつ真意を韜晦する高踏的な煙幕であると、このエッセイの言葉は解すべきであろう。「決してロレンスの中に所謂現代相応とやらを発見したのではない」などという言葉も同断である。

以上、駆け足でみてきたところから、とりあえずの結論を導き出せば、歴史に対してグローバルな視野を持ちつづけた中野好夫と、『アラビアのロレンス』を書いた中野好夫とが結びつくことには何の矛盾もない、ということである。極めて自然な一貫性を読みとることができる、と思うのである。

今となっては作者その人からその真意をお聞きして、私のさまざまの問いと解釈の可否を確かめる術はない。何とも口惜しい限りである。

〔付記〕この稿を書くうえで赤藤了勇、小宮正弘の両氏に資料の面でそれぞれお世話になりました。